

（３）公開シンポジウム

「土・農業・生命の循環から“食”を考える」

【日時・場所】 平成22年2月8日（月）10：00～15：00松本大学 524講義室

はじめに

廣田／松本大学人間健康学部健康栄養学科は、農業県にある管理栄養士養成大学です。私には、そこで学ぶ皆さんが生産者の視点で食生活について考えられる管理栄養士になってくれたらいいなという思いがありました。そこで、そんな視点でものごとを考える機会を作りたいと思いまして、今回の企画を考えました。本日、講師をお願いした菅野芳秀様は、山形県からお越しくださいました。ご講演をお願いするとともに、その後にパネルディスカッションを企画することで、皆さんにも考える機会としてほしいと思っています。

いま、社会はスピード化、効率化、安価なものを求めるというような流れにありますけれども、社会のあり方として、それが良いのかどうかということを考えてみるときかもしれません。食料供給についても、生産者と食べる側を結びつける立場になる皆さんが、そんなことを考えることで、少し世の中が変わっていくかもしれないというようなことを考えています。

今日は、長丁場ですが、菅野さんの基調講演をお聞きした後、皆さんや学外からお越しいただいたフロアの方も含めて、きちんとした活発なパネルディスカッションが展開されることを期待しています。学生の皆さんはしっかりと学習し、フロアの皆さんと共に考えてみてください。

それでは、本日午前中の基調講演をお願いした菅野芳秀さんをご紹介します。

お手元にチラシをお持ちの方がいらっしゃると思いますが、菅野芳秀様は、山形県長井市にお生まれになられ、大学を卒業したあと、農家の後継者として農業に従事していらっしゃいます。その後、百姓国際交流実行委員長、それから今回お話の中にも出てくるとと思いますが、山形県長井市に「レインボープラン」という生ごみの循環させるシステムがあるのですが、それを立ち上げ、その推進を図ってきた方です。非常に大きな功績を残されている方だと私は思っています。現在も、山形農産物安全安心取組認証委員会の委員ですとか、レインボープラン推進協議会委員、アジア農民交流センター共同代表、環境カウンセラー、大正大学客員教授、農林水産省農業者大学校講師などをお務めでいらっしゃいます。

ご著書としては、講談社から「生ごみはよみがえる」、社会評論社から共著で「地域が主役だ」、創森社から共著で「台所と農業をつなぐ」という本を執筆していらっしゃいます。「生ごみはよみがえる」は私もとても好きな本です。関心のある方には是非読んで頂きたいと思いましたが、今日、受付のほうに、大学生協さんから少し割引価格で購入して頂けるように致しました。少しですが、用意してございますので、お話を聞いて読んでみたいと思った方は、昼休みにでもお買い求め頂ければと思います。

長くなってしまい貴重な時間を使ってしまいました。申し訳ございません。それではご講演に移らせて頂きます。

基調講演 「生ごみはよみがえる～土をめぐる生命の循環～」

【講師】 レインボープラン推進協議会 委員 菅野 芳秀 氏

1. 何を伝えたいのか

どうも、おはようございます。

山形県長井市というところから参りました。191センチあり、体重も105キロほどあります。高砂部屋で十両までいったのですが、これ以上は無理だと思って、廃業して、今は山形県の雪深いところで百姓…話の随所でウソが混じるので、黙って聞いていてください。

私たちの長井市というのは、松本市のこのエリアと非常によく似ているのです。山が円形になっていて、畑…後で映します…それからローカル線が走っていて…「フラワー長井線」というのです…それから農地がつながっていて、こぢんまりとした町があります。そういうような風景です。

そこで私は、ニワトリ…自然養鶏で放し飼いのニワトリですが…1000羽ほど飼っています。同時に水田を3ヘクタールほど経営しています。経営というか、作っています。自然養鶏の卵って、皆さん、食べたことはありますか？ おいしいですね。小鉢にタッタッと、卵を割って、中に落としますね。普通の卵はだいたい、ぽんと落ちます。すぐに卵にビビッとひびが入りますが、私の卵は小鉢のほうにビビッとひびが入ります。そういう卵です。おいしい。

今、卵の話になったので、ついでに申し上げますけれども、皆さん、卵というのは、気をつけて食べて下さいね。生産者がよくわかる。たとえば、パコッとあけると、黄身の色がミカン色しているでしょ。あれは自然の色ではありません。えさの中に色素を混ぜて、ああいう色にするのです。それは消費者のアンケートで、黄身の色が赤い色に近いほうが、健康な卵だというふうに感じるというデータをとって、それで卵の色に、つまり実際に色素を混ぜて、ああいう色にするということです。

それからまだありますよ。今の卵は非常に濃厚なクリーミーな味をしています。それもやっぱりデータをとってそういう卵においしさを感じるという、先取り情報をつかまえた業者は、えさ屋さんと相談して、そういう味になるようにしてえさを作っているのです。だから味も色も全てコントロールされたものです。従来、食べ物に関しては、加工食品には「着色料添加」とか、普通書かれています。卵には着色料添加なんて書かれているのを見たことがないでしょ。卵は全くそういうことが必要ないのです。肉もそうです。もちろん魚もそうです。

いろんな加工がなされて食べ物になっていて、今や1人の人間…日本人…が食生活でとる添加物の量というのは、1年間で2.7キロに及ぶということらしいです。赤ちゃんの体重ほどの量を私たちはとり込んでいるわけです。自然でない異物を。その異物が、食を通して人間にどう悪さをするのかというデータはあまりない。だから本当にそういう物から、自分の身を守る、家族の身を守る、あるいは子どもたちの身を守るというのは、管理栄養士の先生方の非常に大切な役割になっていくだろうと思いますので、是非その辺も含めて、農民と一緒に語り合いながら、新しい食と人間の関係を育んで行けたらというふうに、私は思っています。



今日はそういう意味で、皆さんの前で、私どものまちづくりの経験をお伝えできることを非常に光栄に思います。今日は、レジメにありますように、レインボープランの話を大雑把に申し上げた上で、それを作り出した人間の願いや思いに入りつつ、中程から「土は命のみなもと」という所をお話したいというふうに思っています。百姓ですから、物を作るのはプロですが、話をするというのはプロではありません。だから、場合によっては、非常に退屈な時間になろうかと思えます。でかいけど、気が小さいのです、僕。ちょっと、指から血が出たりすると、クラクラッとするような所があります。こっちを向いて、大きなあくびをされたりすると、もうドキドキして、言葉が出なくなっちゃって。もし退屈なときには、下を向いて、あくびをして頂けたらと思います。前置きが長くなりました。

それからもう1つ。何度も繰り返すようですが、今言ったように、知識を皆様にお伝えしたいと思ってここに来たのではないのです。農民の、あるいは市民の情熱、未来への願い、そういう物を皆さんにお伝えできたらと思います。だから言葉足らずの点は、身振り手振りでそれを伝えたいと思っているのだなと深読みして頂いて、最終的にはお伝えできるようになります。ですから、皆さんの協力がなければ伝えられませんので、前置きの、言い訳的に、そのようなことを最初に申し上げさせて頂きました。

2. レインボープランとは何か

さて、レインボープランとは何か。

大雑把にいうと、3万の長井市の人口は、町の中にだいたい6割、周辺部に4割というふうに分布しています。町の中というのは、市街地世帯数でいうと5,000世帯です。その方々の台所の生ごみを堆肥の原料として集めます。年間1,000トンほど集まります。そこに籾殻や、畜糞などを混ぜて約2,000トン前後の堆肥原料から400トン近くの堆肥を作るわけです。そのできた堆肥を村の農地に配る。だいたい全量、町の市民5,000世帯の参加率はほぼ100%です。だから、町の台所の生ごみはほとんどことごとく、村の農地に戻ってくるわけです。そこからまた新しい事業が立ち上がり、なるべく農薬、化学肥料を使わずに作物を作る、そういう農民の側の営みになるわけです。できた作物をたとえば学校給食で使います。地域の未来を担う子どもたちに、まず、それを伝えたい。あるいは町の台所の中で、市民に食べてもらいたい。食べて頂いています。食べていると、また生ごみが出るわけです。それをまた堆肥センターへ持っていく。地域の中で、健康な野菜と生ごみが絶えず循環している…そういう町を作り出したわけです、私たちは。農民の、農家の提案を始めとして。行政主導で作ったのではないのです。市民主導、住民主導で、行政を巻き込んで作っていったのです。その辺のことを後で申し上げますが、途中で声が詰まったり、当時のことを思い出して、思わず涙腺がゆるんだりすることがあるかもしれませんが、一生懸命その話を含めて、お話しします。このレインボープラン、どんな効果が得られているかという、僕の口から話すとほらになるから、人がどこかに書いているところを紹介します。2、3日前に調べたら、こういう文書が見られたのですね。それを皆さんに発表したいと思います。高野孟さんというジャーナリスト知っていますか。ニュースキャスターをやっておられる、高野孟さんという方です。その人がこんなふうに言っています。

「私に言わせれば、1つの市の全世帯が参加する生ごみリサイクルのシステムは、世界最先端の試みであり、地球環境と食の安全が叫ばれる21世紀、世界中の人々が見習いたいと思う地域ぐるみの推進モデルである。生産と消費の完全リサイクルを実現することができれば…今それを続けているのですが…長井市は有機生活の世界的な聖地として崇められるようになるのではないか」というようなことを言っておられます。もう1つ、大野和興さんという農業ジャーナリストですが、この方は、「レインボープランが有機物を通してつなぐ、『人と土』『町と村』『人と人』の循環の輪は、

現代社会の闇を照射している。」すごいですね、言い方が、ジャーナリストは。「闇を照射している」って。「今のようではない、もう1つの世の中の有り様、人の暮らしの有り様を浮かび上がらせている」というすごい表現でレインボープランのことをほめてくれています。

毎日新聞とか、朝日新聞、NHK、全国農業中央会とか、そういうところから循環型地域社会の理想的なモデルということでも評価されましたし、地域循環農業の理想型でもあると評価されたり、農林水産省が年ごとに出す農業白書というのがありますね、その中にも何回も登場することができました。環境省の行政白書でもある、環境白書にも何回も登場しています。

前置きをする前に、具体的に説明しろということでしょうが、それを今からフィルムを通して、映像を通してやっていきたいと思います。

3. 長井市はどんなところ？

これが長井市の風景です。「これが」といっても、向こうに見えるのが朝日連峰、手前の森のように見えるのが河川敷で、最上川です。その間にある町が長井市です。

山形県というのは、なかなか目立たない県ですが、日本海の方に向いて、にっこり笑っている横顔に似ているのです。そののどちんこの辺りが長井市です。どこか松本と似ていませんか。

今のこの風景というのは、朝日連峰のほうから見た、先程とは逆の方向から見た風景です。人口3万。町の中に5,000世帯、周辺部に4,000世帯といわれています。3,000ヘクタールの農地に囲まれている小さな田舎町です。これが今の風景です。

これが俺んち。この平べったいのが、にわとりたちが生きているところです。夏は、このど真ん中あたりにむしろを敷いて、酒を飲むんです。これがまた、うまいんだ。

長井市は「水と緑と花の長井」といっています。坂上田村麻呂ってご存知ですか。蝦(えみし)夷征伐に京都から派遣され、蝦夷を征伐した征夷大將軍。我々のところが征伐された蝦夷です。坂上田村麻呂が、戦に勝った…征伐した記念として植えていったのが、この桜だといわれていて、樹齢1,200年。遺伝子で調べたそうですが、やはり樹齢は1,200年だそうです。この下のあやめ…100万本のあやめが春になると咲きます。このつつじも樹齢400年というのがいっぱいあり、白く咲き乱れます。ということで、花の長井と周辺からいわれています。

これが市街地ですね。人がいないでしょう。ほら、人がいない。でも、風景を見て頂ければ、こんな町というのがわかり頂けます。

4. レインボープランが作り出す生ごみの循環

ここから始まります。今からレインボープランの説明になります。山形県は何世代かが一緒に同居する世帯が日本一です。こういう風景が、結構あちこちの家々にあります。夕食の風景を撮らせてくれというふうをお願いして、カメラを持って行ったところ、すごく豪華な夕食になっていました。花があったりして、いつもこんなふうをしているわけではないのに、普段で良いのにといいながらも、もっと粗末な物をのっけてくれと言えなかったのも、そのまま撮ってきました。こんな風景から始まるわけです。

そして生ごみは必ず出ます。出た生ごみはこういう二重バケツ…水切りバケツといっていますが…そこに生ごみを置く。生ごみに限らず有機物が堆肥になっていく。有機物が自然に土に戻って行って、根からまた吸収されるわけですが、そういう分解する営みというのは、多くは好気性発酵なのです。だから水がたくさんあったりすると、腐ってしまうのです。腐るというのは、発酵ではなくて、腐るのです。腐るのではなく発酵の側に生ごみを誘うのには、水を切らないといけません。鮮度の良いうちに堆肥センターに運ばなくてはいいけませんので、このように家庭では、水を切って

頂いています。そして週に2回、こういう形で5,000世帯から約230カ所にある収集場所に運んでもらうわけです。生ごみについて一番心配なのは、異物が混ざることです。異物が混ざったらまさにこれは「ごみ」ですから、堆肥の原料になるわけではないので、いかにしてこの「ごみ」を減らすかが重要です。これはもちろん、長井市民みんなが学習をしっかり積んでいくのは絶対条件ですが、しかし学習だけでは、なかなか毎日毎日のことですから、できないですね。

俺も実は、環境省の資格の環境カウンセラーなのですが、時々分別がいい加減になったりします。それが普通の人間というものですよ。だけど、毎日毎日、とにかく毎日、きれいな分別の生ごみが出されなければならない。そのためにはどういうことが可能か。勉強だけではだめ。そこで作り出したのが、システムです。

見えない紙袋の中に入れると、どうしても雑になってしまうということで、このように誰がどういうごみを出しているかわかってしまうシステムが作られました。こんな感じで人が集まることはまずないですよ。撮影のために集まったのです。普通に、出そうと思ってあけてみたら、ごちゃごちゃとビニールごみが混ざっていた…それでパッとみたら、ちょうど人が帰って行くところだった…ああ、あの人が、あの人はこんな出し方しかできないんだということになる。すごく良いことをいつもいうけれど、実際はこうなんだということになってしまう。それは地域社会の中ではないやなことなのです。そのように、なんというか、評価されたくないと、皆さんも、私も思っているわけです。「やはりさすがだね、きちんとごみを分別できているね。そういえば家庭もしっかりしているしね。」と、表向きそういう評価を得たいわけです。つまり、なんというか、どの方が分別が良いか悪いかがはっきりわかるような形にしたのです。皆さん、最初は背伸びして分別して出されていたのですが、稼働して今12年です。12年経って、改めて聞きますと、習慣付いてしまった、大変でもなんでもない、普通にできていますとおっしゃってくれています。今も、きれいな分別された生ごみが鮮度の良いうちに出されてきております。

それからもう1つ、生ごみをごみとして…ごみ処理として…ごみの減量化として堆肥にしようというのでは全くありません。市民1人1人の家から出されていく…きれいな分別した生ごみを出していく…その過程の中で、意識が少しずつ変わっていく。私たちはそのところに非常に大きな重点を置いているのですから、生ごみさえ集まれば良いということで、産業系の廃棄物を大量に集めようという気持ちは全くありません。一戸一戸の台所から出していく、そしてみんなが地域を作っていくとする、健康な食を育んでいくとする、この営みが大切だと思っているものですから、個人個人のところにこだわっておりました。

生ごみは堆肥センターに集められます。これが堆肥センターですね。このように投入されていきます。畜産農家がやってきて、畜糞を投入します。籾殻が投入されます。そして第1次発酵して、2週間ほどすると、このように全くカボチャとか、サンマの頭とかというものはなくなってしまって、まさに土色の堆肥ができあがっていきます。ここまで3ヶ月かかります。

堆肥というのは、原料はたくさんあったほうが、多様な養分を含む堆肥になっていくのです。家畜の食べ物というのは、だいたいそんなにたいしたことはないです。量からいうと、大豆カスとか、こめかなどを食べているわけですから、そこから出されていく糞、それが発酵して堆肥になったとしても、大して養分が含まれていないのです。そういってはおかしいですが、生ごみに比べたらです。生ごみの場合は、サンマの頭からにんじんの皮まで、たくさんの違ったものを含んでいるものたちの、何百という集合体なのです。それを堆肥にしたときに、ものすごい多様なミネラルやビタミンがその中に含まれている。根がそれを吸収して、作物を作り出すわけですが、非常においしいという評判の作物ができあがるわけです。レインボープランの堆肥を3年、4年使ってきて、毎日だけど、なんだか最近野菜の味がうまいというふうにいわれるんですよ。お客さんからもおいしいという評判を最近もらうんだよね。やっぱりそうなんだと、そんな感じです。

金属物は磁石で取りますが、ビニール異物がもし入っていたら、ふるいで取ります。これが

5,000世帯が1ヵ月で出すごみです。少ないでしょ、すごく。年間40キロくらいですね。これで1ヵ月分です。できた堆肥は、農協を通して配られていきます。

5. 安心安全の作物づくり

先ほど申し上げましたように、100%の参加率ですので、すべての台所の生ごみが田畑に戻るわけですが、ここからがレインボープランの先程言ったように安全安心の作物づくりです。作物ごとに基準があって、それは慣行栽培の2分の1以下に農薬も化学肥料も押さえるという基準。そうすると、その堆肥を使える。そういう基準。クリアした作物には、このような認証というシールが貼られ、町中に出回る。こういう感じですね。これは町の中の…町に大きなスーパーが3つありますが…その中にレインボープランコーナーがあって、直に市民に届きます。こういう方法もありますし、有機農法をやっている道の駅という直売所がありますが、そこでも扱っていますし、このように加工食品になって…これはクッキーですね、お酒があります、豆腐があります、納豆があります、それから他にもいろいろあります、レインボープランまんじゅうとか、レインボープランそばとか、レインボープランラーメンとか、お味噌とか、漬け物もちろんあります…そういうふうになって、町の中にまた戻っています。

お米は市内に米屋さんがレインボープランという桃太郎の幟を掲げて、市民にアピールしています。これはレインボープランのラーメン屋さんですね。8つの中華料理屋さん、ラーメン屋さんでレインボープランラーメンを出しています。

これは先程話した直売所です。私たちがやっているNPOで経営しています。

このように町の中の生ごみが姿形を変えて、また町の中に戻ってきて、そこで市民たちがまたそれを買って求めています。

もう1つNPOがあります。これは農家3名に消費者40名くらいが参加して作っている市民農場。レインボープラン市民農場というものです。先程のこの道の駅も…普通直売所というのは、ファーマーズマーケットですね、農家が自分たちの作物を直に消費者に提供する農家経由なのです…これは、NPO経由になっていますし、同時にこの中で20数名の市民がボランティアがレジをしたり、店の掃除をしたりしています。消費者市民がとりし切っているのですね。

この市民農場の40名の市民ボランティア、消費者ボランティアが作物づくりに参加しています。なぜか。まさにレインボープランのシステム自身が作り出した雰囲気なのです。これは後でもう一度述べますが、消費者は一方的な作物の消費者、食の消費者ではないのです、レインボープランでは。作物の消費者である市民は、同時に堆肥の生産者になっていくのです、レインボープランの場合は。作物の生産者でもある農家は、同時に堆肥の消費者にもなっている。つまり、作物を作り出していく、この命の営みを生産者と消費者が一緒に参加しているという、そういう町なのです。みんなが自由に関わり、みんなが食に参加をする町なのです。だから、この作物に関しては当事者でもあるわけですから、市民が直売所で、「私たちも」ということでボランティア参加で20数名の方々が運営しているし、また、新しいこういう農場では、消費者市民が密に関わって、一緒にボランティアしながら作物を作り、ここから生み出された作物は、学校給食だ、幼稚園だ、町の台所だというところに受けとってもらいます。

これは学校田で、皆さんもそうだったと思いますが、学校ごとに田んぼがあって、ここでもレインボープランがしっかりと入り、まずは堆肥を作ってくださいということになります。

6. レインボープランの理念

だいたい大雑把にレインボープランのシステムをおわかり頂いたと思います。みんなが食に関わ

り、農に参加をする。レインボープランには3つの利点があります。1つは「循環」。今、見たように、町が堆肥を作り、村は作物を作り、消費者と市民、生産と消費が融合し、循環的な関係の下で、健康な食、健康な地域、循環の環境を育んでいこうという、市民ぐるみの事業だということです。「循環」です。

2つめは「共に」ということです。これを推進しているのは、レインボープラン推進協議会。これは行政主導で作られたものではなくて…行政も含みますが…60名から100名の市民がレインボープランの委員になって活躍しています。だからレインボープランに関わる様々な問題は、行政が拾い集め、行政が決定するのではなく、行政と市民が同じ地域の生活者として、同じ情報の下に、開かれた情報の下に議論をし、イコールの形で議論をし、研究を分かち合うというふうにしています。「共に」ということです。

3つ目は「土は命のみなもと」ということです。「土は命のみなもと」という考え。この3つの理念が私たちの理念となって、このレインボープランを作り出してきたわけです。

田舎の出世は都会になることじゃない。田舎は、都会になって良かったねで終わる、そういうエリアではない。田舎は堂々たる田舎になっていけばいいのだ、堂々たる田舎への道を、私たちは生ごみを活用して進めていく、そのように思っています。

いくつかの成果がありましたが、いってみたら、町中の生ごみ100%が土に戻ったということです。それから健康な農産物が、たとえば3,200名の小学生、中学生…義務教育下で給食のサービスを受けていますが…その給食として利用されています。全てご飯給食ですが、そのご飯を全てレインボープランがまかっています。また、旬の野菜が子どもたちの口に入っています、等々、様々な試みが行われ、様々な成果を上げています。大きいのは、ここに書いてありますように、私たちの地域が誇りだと市民が思えたことです。生ごみがあって、畑があって、田んぼしかない、それだけのことなのです。それだけのことなのですが、人と人とが協力することを通して、健康な地域社会ができあがってきた。そのなかで賞をいただくこともありました、私たちの地域が誇りだ考えられるようになったのです。ともすれば農業、農地が多い地域というのは、時代に取り残されたような感じを持って、俺が大きくなったら東京に行く、という感じになりがちですが、ここは私たちにとって誇りある地域だと、市民が思ったというのは、本当に大きな事だと思います。今は、農業がなかなかからみづらいという時勢の中で、逆にそういう自尊心、誇りを持てたということは非常に大きいと私は思っています。生ごみを燃やしたならば、この町はできなかった。生ごみを生かして、田畑があって、町が大好きな人々がいたということで、これができあがったということは、大きいことだと思っています。

7. 土と食べ物との関係

今、大雑把な説明を申し上げました。ここから、皆さんと関係のある話に移っていきます。まず土という物です。土というのは、農地の土のことを言っていますが、最近すごく、いや、ずいぶん前からですが、土が20～30年前から衰えているという、パワーダウンしていると私は思っていました。私だけでなく、おそらく全国の農民がそう思っているに違いありません。

皆さんのところにグラフがいつているでしょ。食品成分表にみるピーマンの質の低下。1950年がビタミンAが600、単位がなんというのかわかりませんが、なんて読むのですか、マイクロ



グラム？なんというのかわかりませんが、600単位入っていたんだそうです。これは食品成分表って、政府機関が発表した数字ですよ。それを、年代ごとに比較したやつなのです、これは。全国平均なんだろうと思いますが、つまり1農家のピーマンだけを持ってきたというわけではなくて、複数のピーマンを丹念に分析しながら出した数字だと思いますが、1954年は、600単位のビタミンAが入っていた。ところが2001年には、33単位になった。ビタミンB₁は、0.1あった。それが2001年には、3分の1になった。ビタミンB₂は半分以上になった。ビタミンCも3分の1になった。

皆さんのところに、同じようなグラフが、もう一ついつているでしょ。白菜とか、ニラとか書いてあるやつ。これも軒並み同じようになっているだけでなく、そこにはミネラルの分析結果も出ていますね。ミネラルもやはり同じように減っていますね。だけど、ミネラルというのは、ビタミンもそうですが、私たちの体を作る上で欠くことのできないものですよね。それが減っている。たとえば、ビタミンAをピーマンからとろうとしたら、昔の1個は今の18個食べなくちゃならないというふうになっているのです。他のミネラルも、昔の1個を補給しようとしたら、1.5倍とか、2倍とか3倍とらなければならなくなっているのです。昔の1954年あたりに体を作ってきた…俺たちがそうですが…その1.5倍から3倍も、みんな食えるか？ おそらくみんな食えないと思うよ。場合によっては、俺たちよりも食が細いかもしれない。だけど、こういうものなのです、食の中身は。ピーマンだけじゃなくてですよ。

いってみれば、今の子どもたちは…これは絶対大事だから聞いてよ…こういうもので、自分の骨とか肉とか体を、脳みそを含めて、血液も含めて、作らなければならない、作っているという事なのです。だから、集中力が続かないとか、途切れて眠くなっちゃうとか…これは彼が、彼女が、昨日夜更かししたからではなくて、体力が続かないからだだと思います。気力も続かない。当然だと思うな。なぜかという、こういうもので、体を作らざるを得なかったから。そんないい方をしたら、怒られてしまうかもしれませんが、一般論として聞いてくださいね。

よく「ぶつつんする」とか、「最近の子は切れやすい」とか、その彼ら、彼女らの育った家庭に問題があるとかいいますが、それはそうではなくて、食べ物に多くの原因があると思っています。こういうもので、見かけ上180センチの男性、あるいは160センチの女性がたとえばできたとしても、本当にぶるぶると震えやすい、非常に弱い、どっしりとしたものではない体になりがちで、その上に乗っかっている精神というのは、やっぱり影響されやすいと思います。

話はちょっと変わりますが、アテネオリンピックというのはちょっと前なのですが、そのときに我々のところにライフル射撃チームが来て、合宿をしていったのです。1ヵ月くらい来たかな。その監督さんに来ていただいて、講演してくれとお願いしたら、快く引き受けてくれて、彼がしゃべったのは、これをしっかり彼は知っていましたね。プロなんですね。栄養士のプロがそばにいらっしやるのでしょうか。今や、オリンピックというのは、世界各国の食べ物競争になっているというふうに彼は言い切っていました。つまり、こういう食べ物を食べて、そしていくら練習に練習を積み重ねても限度がある。やはりこういう1954年のこういう食べ物を食べてこそ、初めて技術、集中力…やはりライフルというのは集中力が大事だし、長い試合ですよ…だからこそ、そういう力が必要なのですが、こういうものを食べてこそなんだと、彼は言っていました。だからここに来て合宿をしたんだと言っていました。

同じことが、パイオニアレッドウィングスという…知らないかな…山形の中にあるプロのバレーボールチーム。栗原がいるところですよ。その栗原の監督の話聞く機会がありましたが、全く同じ話をしていました。食べ物は、こういう食べ物でなければならない。これで初めて一流のプロバレーボール選手になれるという話をしていました。

やはり食べ物です。食べ物こそ、大事だということです。あるとき飯野先生という、僕たちの総合病院の院長をしている先生なのですが、聞く機会がありまして…本当のところは、廣田先生から後で伺いたいと思っているのですが…彼はこういうふうに言いました。「18歳までに何を食べたか

によって、その人の将来の健康が決まってくる。」と。そうかなと思いますが。18歳まで、しっかりと…皆さんもまだまだ遅くないから、インスタントラーメンみたいな物ばかり食わないで、コンビニの弁当やコンビニのハンバーガーみたいな物ばかり食わないで…これだけの農地に囲まれているのだから、白菜買って行って、調理して食べる。それもできたら、堆肥を使って作ってくれる農家から買って食べるということを習慣づけたらいいと思います。そうすると、こういう食べ物で、皆さんの体がどんどん置き換えられていく、皆さんの体の長所が。18歳までに何を取り入れたかによって、その人の将来の健康が決まってくるそうです。

俺たちの所はさ…たぶん皆さんの所もそうでしょう…新宿のスーパーマーケットの2階、3階にあるマンションに暮らしているわけではないので、これだけの農地のど真ん中に我々は暮らしているわけだから…皆さんの帰っていくふるさとにも、たぶん、そういう地域が多いでしょう…農地と自分たちの食の関係、あるいは学校に行っている子どもたちの食の関係をしっかり見直しながら、新しいこういう物を提供できるシステムを築いていく。そういう考えを訴え、そのようにお母さんやお父さんに訴え、市民に訴え、農家に訴えて、新しい食と命の関係、土と命の関係を育んでいくというのも、君たちのたぶん大事な大事な仕事になると思うのです。是非、ここのところを「こういう事なんだ」と知っておいて頂きたいと思います。

肝心なことを言っていない。何がこの差を作ったのかということです。これを言わないと話にならない。

1954年は、実は堆肥で作物を作っていた時代なのです。2001年はというと、堆肥も申し訳程度には入っているだろうけれども、主に化学肥料と農薬で作ってきている時代なのです。かくも違うのです、作物のパワーが。堆肥で育んだ作物か、化学肥料、農薬で育んだ作物かの違い。単なる農法の違いではなく、含んでいる命の強さ、豊かさの違いです。食べるということは、つまり作物の命を私たちの命に加えてもらうということでしょう。食べるということは、命の循環に私たちが参加するということだけれど、まあ、白菜なり大根の命が私たちに加わる、その命が強いかわ弱いかによって、俺たちの生命力も決まっていくということだと思うのです。

さっき話をしたところに戻ります。土の衰えというのが、レインボープランの事業の背景にありました。土を伝統的に豊かにしてきたものは何かというと、やはり堆肥なのです。なのに皆さん、松本周辺ではどうでしょうか。牛や豚って、います？

俺たちのあんな雪深いあの農村でも、あのエリアに豚やら牛は、いなくなっているのです。小学校6年生に「豚を見たことがない人は手を挙げて」というと、ほとんど全員が手を挙げたんです。「牛は？」と聞くと、さすがに3分の1くらいしか手を挙げませんでした。やはり見たことがない。にわとりを飼っていますが、俺の所を通過する人は、見ているのだろうが、そうではない人は、にわとりなんて見たことがない。どこに行ってしまったんだい、豚や牛やにわとりは。海外にいるのですね。海外にいつているわけです。そこから枝肉となって日本に出荷されてくる。肉とか乳製品はそれで良いかもしれませんが。でも、地域の土を豊かにしていた…江戸の大昔から今まで…伝統的に土を豊かにしていた、重要な循環の装置であった、牛や豚の糞はどこにあるか。それは、中国にあり、ニュージーランドにあり、アメリカにあるのです。そうすると、日本の土は何によって豊かにすればいいのかということです。

8. 土を考えることから始まった！

農林水産省は、環境保全型の農業をしろといいます。だけど農薬を減らし、化学肥料を減らしてもいいだけの土は、何によって作ればいいのか、それを農林水産省はいわない。だから、化学肥料と農薬の農業から脱しきれない。わかっている、ないんだから、代替の有機肥料が。

これはなんともならないと思いました。俺はせっかく農民なわけで、農業をやる以上、もっと人

類への幸福に…かっこいい言い方をすればですよ、いろんな煩雑なことを考えていましたよ、嫌らしいことも考えていたけれど、まぁきれいな言い方をすれば…その皆さんの幸福にどう貢献できるか、物を作る立場からということですけどね。だけど、こういう問題があるんだ。こういう作物しか作れなくなってきているんだとわかりながらも、営々としてこういう作物づくりをしなければならぬ農民というのは、やはり辛いです。

それで何とかしなければならぬと思ったとき、まず家畜はもうない、だめだと。そして気がついた。なんだこんなにも、糞があったんじゃないか。それは人間の糞ですね。3万の人間がいるので、その糞を活用すれば、また家畜とは違う意味での、良い堆肥ができて田畑は肥えるかもしれない。こんな野菜づくりが始まるかもしれないと思ったんだ。そして屎尿処理場の門をたたいた。「堆肥になる可能性はありますか」と。「菅野さん、良く来てくれた。こういう物を私たちは作っていました」と言って、チョークのような物になっていました…ペースト状になっている黒いチョーク…これを手の上にのせてくれたんですよ。「これ何？」と聞いたら「人糞です」と。「えーっ」と思いながら、においをかいだら、うんこのにおいがしなかった。何もにおいがしなかった。これを田畑にまけば、こういう野菜づくりが始まるのか。新しい農業が始まるのか。これは循環でもあり、環境にも資する。そうなんですかと聞いたら、「残念ですが、できません」と。どうしてですかと聞いたら「人糞だから」。堆肥というのは、何でもして良いのではなく、農林水産省がちゃんと安全基準を作っている。その中に安全基準を超える水銀が検出されました、チョークから。だから使えませんかと言われました。水銀うんこ。水銀というのは、蛍光灯とか、鏡のところに張られています。乾電池とか。自然界に水銀もカドミウムもあるわけだけど、人類はそれをうまく集めて、こういう物を作り出したのです。それがまたやがて、自然の中にばらまかれているのです。人間は水銀を食ったことなんかない。みんな、ガラスを食べてにこっとしている人を見たことがある？あるいは誰も知らないところでバリバリッと蛍光灯を食っていたという人を知っている？いないよな。いれば、その人のうんここそ、犯人だと言って、「あなたの好みは尊重するので、うんこだけ別にしてくれ」と言えば解決が付くのですが、そういう人はいない。

つまり、生体濃縮ですよ。皆さんも学んだと思いますが、様々に濃縮され、濃縮され、濃縮され、濃縮された結果、私たちもまた、必ず濃縮している。そこから母乳となって出てきたり、赤ん坊に。そういうことがいろいろといわれてきた。マスコミに騒がれたときには、いろんなふうにそういうものではないものを食べようと工夫されたが、問題が何も解決していないのに、マスコミが騒がなくなってしまった。私たちの体の中にも、やはり水銀が濃縮されてあって、みんなのうんこもやっぱり、肥料に戻そうとした場合には、水銀うんこなんだろうと思うのです。「くそ、役にも立たないくそっ！」とそのときは思いました。

それではだめだということで、では俺たち農民にとって、こういう作物を作る可能性はないのかと思っていたら、あった。生ごみがあった。これが背景の第一です。生ごみだ。市民の台所で、役に立たないもので、燃やされていた有機物。これのかかなりの量が毎日出る。それをうまく活用すれば、こういう作物が作れるんだと気づいた。

一方で町でも、ニュージーランドのカボチャとか、アルゼンチンのじゃがいもとか、ピーマンというのは、どんどん町の中に入ってきますね。同じものが地元で作れるにもかかわらず、安いからといってどんどん入ってきて、それを買っていた。でも何か不安だ。そういう食への不安がありました。できたら地元のものを食べたい。つまり、地元のものを食べたいという消費者と、消費者の中の生ごみを活用したいという生産者と、この願いが一緒になって町が堆肥を作り、村が町の台所の健康を支える作物を作るというシステムが考えられ、できあがってきた。

プランニングと実験事業、町中の方々を巻き込んでそういう方法で町を作ろうという流れを作るまでに、8年かかりました。そして堆肥センターができて、稼働して12年、今に至ります。

9. 夢に惚れる

俺、38歳くらいの時から始めたのです。まだどこか、青春の光りみたいなものを持ちながら、そういう表情でやってたんだろうと思います。初老の今まで没頭しましたね、この事業に。もちろん、この事業を組み立てて完成させるまでに楽しいことばかりではありませんでしたよ。枕を濡らすこともたくさんありました。あったけども全体的におもしろかったね。大変な苦労はあったけど、君らのこれからの人生に大変な苦労、いやになるくらいの苦労はあるかもしれない。「だけど」というのが付くんだよ。あのな、たとえばさ、好きな恋人ができて、その人のところに行く過程がマイナス3℃で吹雪だった。そこへ行くまでの過程というのは、大変だし、ある意味では苦労かもしれない。だけど楽しいだろ。辛くはない。夢を実現していく道というのは、そうだよ。大変だし、場合によっては苦しいこともあるだろうけれど、辛くはない。そういう過程でした。これは後で、もうちょっと述べさせていただきます。



だから君たちも、夢に惚れる。惚れた男に、惚れた女に会いに行くように、夢に惚れ、その夢を引きつけるためへの過程は、苦しいかもしれないけれど、辛くはない。たぶん、そういうことだろうと思います。是非、皆さんも夢に惚れてください。

そういう過程の20年間でした、簡単に申し上げますと。今、冒頭に言いましたように、土の話をしっかりやりたいと思いますが、ちょっと待って下さい。夢の話をしたいと思います。

行政が作ってくれた事業ではないのです。最初、本当に俺とか、何人かの人たちの中で、こういう町を作りたいと。それこそ、何人かの人というのは、力を持った市議員とか、農協の組合長とかというような、力を持った人間の2～3人ではないのです。地域社会の中では本当に吹けば飛ぶような、そういう無視しても誰も傷つかないし、何も起こらないというようなそういう2～3人なのです。だけど、こういう町を作りたい、生ごみを活用した新しい町を作りたいというふうに思った願い、こういう願いを持って町の中に繰り出していったわけです。そうして、多くの市民たちに語りかけ、市民から市民に、その願いが広がっていき、市を構成する商工会議所、総合病院、青年会議所、それから婦人団体、消費者団体、政党だということにどんと広まって行って、是非そういう町を作ろうという市民の輪が広く、熱を持ってできあがっていったのです。そこから農協ではなくて、行政に向けて、こういう町を作りたい、検討を進めたい、行政にたまっているマンパワー、情報、情報だけでなく、是非農具を活用させてほしい、是非使わせてくれと訴えていった。つまり行政も参加して一緒に考えてくれと。こういう町ができるか、期間は1年間、同時に予算が欲しい、50万円ほど欲しいと要請した。市長は、やろうとする方向と集まって検討しようとする方々の名前、それから熱意を感じてくれ、「わかった」ということで行政が委員として繰り出した。

その後で今度は農協に行った。行政も農協も新しい農業のあり方、新しい食と土のあり方、命の循環の方向性をみんなで考えてみたいと思うと言ってくれました。しかるべき家の土地、宅地を出してくれると。これでこのプロジェクトに向けての人員は整った。それで1年間の検討の後、断固としてやるべし、ここにこそ、未来がある、やろうじゃないかという結論が出て、投資した。

そうしたら、前の市長とは替わっていて、「前の市長の指示だったり、傘下だったりしたんでしょけど、私に替わりましたので、それはやりません」と言われて、なんだったのかということもありました。それでもなお、新しくまた作り直して、市長にお願いして、同じような人員を整えて、市長に注ぎ込んで、市長にその気になって頂いて、検討委員会を始めていた。

そんなことを何度か繰り返しながら、8年間、検討してきました。5年間で300回の会議をしています。300回というと、1年間に55の1週間があるでしょ、かける5年だから、275回の1週間があ

ります。5年間で300回ということは、1週間に1回以上の会議をずっと5年間続けたということです。それもみんな無給ですよ。何十人ももの市民が。各界各層、個人的にもしたいという人が集まって、何十人という市民が300回の会議を行った。その流れの中で、1997年に堆肥センターができあがり、この事業が稼働していった。

今、市民がこういう野菜を求めようと思ったら、さっき言った NPO に行って、あるいはスーパーの一角で求めることができるし、またこの事業に参加しようと思ったら、様々に参加できる。こういう町ができあがってきたわけです。

このところで、一つだけ言いたいのは、私に力がないなんて思わないこと。たとえば俺、俺はこんな元相撲取りだけど…これはうそだけど…さっき言ったような、吹けば飛ぶようなもの。「おまえたち、よくゼロからこんな町づくり始めたな」とよく言われる。ゼロから始めたという認識は俺にはなくて、マイナス500メートルから始めたという認識がある。ゼロからではない。なぜかという、減反を拒否したことがあった。減反を拒否した。農民の未来はそこにはないと拒否した。3万人の人口の中で、かなりの農民がいるわけだけど、俺だけが拒否した。「彼は、農民の切なさをわかっているんだけど、それを引き受けなければならない農民の切なさが彼はわからない。彼は自分勝手だ」こういう意見が地域社会の中に広がって行って、俺はほとんど村八分状態。

団塊の世代…みんなのお父さんやおじさんくらいの年代…60年代から70年代に青春を迎えていた人たちがいるわけだけど、いろいろ学生運動があった。社会問題に取り組んだ。水俣とか、神通川のカドミウム汚染とか、ベトナムの戦争反対だとか、学生運動が盛んなときがあって、俺もそれに参加したことがあった。それは村社会の人たちも知っていて、「あいつは馬鹿だ」と。やはりそういうことの延長線上で減反を拒否したんだと、なおさら村八分に拍車がかかったことがあった。そんな俺がいうわけだよ、「やろう」って。そうすると、みんな腰を引く。「えーっ」そんな運動に参加するのいやだよ。だけど、やはり願いを持って訴えていけば、通じるんだね。今言ったように、人から人に、人から団体に広がって行って、どんどん輪が大きくなって、行政を引き込み、農協に参加を促して、これが立ち上がって動き出すという方向に。つまり、地域が変わっていく。だからみんなだってそうなんだ。問題は願い、夢。願い、これを強く自分の中に持って、人々に語りかけるならば、どんな鍵だってあく。俺はそういう教訓を得たな。

今、全国から長井市に向かって、いろんな方々が視察にお見えになります。今度、廣田先生も視察においでになります。国内だけでなく、海外の42カ国の方々が、長井に視察にお見えですよ。すでにタイにレインボープランという名前の生ごみと健康な農産物が循環する町づくりが始まっています。願いは通じるのです。みんな同じようなところで悩んでいたんでしょね。

そんなことなので、もし君たちがこれから志しを持って、社会に出て行くとき、あるいは志しをこれから作るころだと思いますが、夢を持って出ていくときには、しっかり願えば、不可能はないと思った方が良いでしょう。必ず、そこからそれ自体は実現しないかもしれないが、得るものはたくさんあると思います。

10. 土は過去と未来の共有財産

ここで、さっき3つの理念と言いました。「循環」「共に」もう1つ、「土は命のみなもと」この「土は命のみなもと」という所を少し説明したいと思います。

土は、砂とは違います。砂は岩石が砕かれたもの。土はそれもあるけど、それだけではない。粘土土というものがあるけれど、あれは岩石が化学変化を起こしたもので、土ではない。では、土というのは、何か。砂でなければ粘土でもない。何が加わって土になっているのか。農民にしてみたら、そのへんが最初の原点なんだよね。作物を作ることのね。土というのは、結論を先にいうと、今まで生きていた物たちの遺体なんです。今まで生きてきた物たちの遺体の集合体が土なのです。

さっき見ていただいた朝日連峰、あれは広葉樹林帯で、春はバーッと若葉をつけて、冬には、それらの葉を散らして、土に戻っていくわけです。森が1センチの土を作るのに、どのくらいの歳月が必要かという、600年から1000年だそうです。そのくらいの歳月をかけて土を作ってきたわけです。

今、ちらっと、全く関係ない話が浮かんだので、忘れないうちに、是非。ま、いいか、やめておく。いや、気になるから、話します。

皆さん、連作障害って知っていますか。大根をたとえば、カボチャでも良いけれど、1年、2年、3年、4年作り続けると、やがて、ろくな大根、ろくなカボチャができなくなっちゃうんだよ。連作すると障害がいっぱい出て、良いものができなくなっちゃう。連作障害っていうんだよ。なぜかという、すぐにわかるよね。カボチャを作り出したというのは、カボチャ分の養分が、土からなくなったということです。もちろん窒素、リン酸、カリを入れればいいかもしれない。だけど、来年もまたカボチャを作る。足りないものが、どんどん窒素、リン酸、カリは人間が考えて、いろいろ代用するのだけれど、それ以外のもので、足りないものがたくさんできてしまう。それで連作障害ができちゃうんだな。

森というのは、連作障害があるかな。今年、森ができて100年で、連作障害で全部の森がなくなっちゃったって聞いたことがないだろ。何千年も、何万年もたぶん森なんだよね。なぜそこには、連作障害がなくて、畑には、連作障害があるのか。

循環ということだよ。葉っぱが足下に落ちて、土になり、その養分を根から吸収して、葉っぱをつけ、また葉っぱが足下に落とされ、土を豊かにし、それを吸収して葉っぱを作る。この循環の営みの中に、カラスが糞をしたり、雷が鳴って、大気中の窒素が固定化されて根が吸収しやすくなるなどのプレゼントがあって、あるいはカモシカがラッキーにも、自分の足下に糞をしていく。そういうラッキーがあって成長していくわけなんだよな。同じことの繰り返しだけ、成長していくわけだな。

忘れないうちに言うておくけれど、この循環こそ地球環境を守り、生きていくキーワードなのです。大気の循環、水の循環、有機物の循環、この滞りが環境問題なのです。だから、環境を守れということだけでなく、循環を取り戻そう…我々の暮らしの中に循環を取り戻そうということが、私たちのスローガンでなければならないわけです。

たとえば、俺。みんなの前でこうやって立っている、190センチの大男。これは常に休むことなく、血液が循環している。空気を取り入れて循環しているから、こうしてしゃべっていただけるんだよね。もし俺のこの循環が途絶えたら、どうなると思う？ すぐに119番で、病院に連れて行かれることになっちゃう。循環があるから生きている。地球も循環があるから生きている。地球の木々も動物も、小鳥もみんな循環、命あるもの全ては循環を体内の中で回している。地球の循環の一部である。地球の循環と彼らの循環は通い合っている。地球と一体的に暮らしているのが、俺たちなんです。

環境問題を象徴しているキーワードは「循環」なんだ。命の営みを町の中に、人々の暮らしの中に取り戻していくということが大事なんだという意味で、森の循環の営みを、町の中に実現し、それを作り出していく、これが実は「レインボープラン」だと思ってください。だから、環境問題を考えることは、大事なんです。生ごみを作ったのは、人間だけ。それを土に戻せて、循環を取り戻せるのも、人間だけなのです。それを町ぐるみでやっているのが、「レインボープラン」なのです。だから環境問題という観点も大事だという話です。

先程の土の話に戻ります。その土ですけど、生きている物たちの遺体の集合体なのです。たとえば大根を植えたとしますね。イメージしてほしいのですが、狸が来た、パタッと森の中に倒れた、そこに少しの土ができた、その土に松のみが落ちて、松は狸の養分を吸っておいしいおいしいと伸びていって、大きな大木になった。やがてその松も、成長して、朽ちて、土になった。そこにまた、

少し土ができた。そういうことで、土になったわけですが、そこがやがて畑になり、大根の種をまいた。大根は狸や松の養分を、当然吸収しながら成長するわけです。だから、大根という一つの命を割ってみたら、その中には、狸や松の木がにっこり笑って存在している。

もちろん大根や狸だけでなく、関ヶ原には関ヶ原の武士がいるかもしれないし、恐竜がいるかもしれない。旅人がいるかもしれない。ワラビ取りで行方不明になったばあちゃんもいるかもしれない。そういう膨大な命の集合体が土を構成していて、そして大根という命を育んでいる。大根という命は、1つの命でありながら過去のたくさんの、たくさんの命の集合体だということなのです。命の集合体、命が命を育てていく。このところがとても大事で、たとえば砂場に種を蒔いたって、命は育まれない。粘土のところに種を蒔いたって、成長していかない。やっぱり命の集合体が堆積しているところに蒔いてこそ、初めて命は成長できる。

実に不思議な世界が土というものの中にある。土は、今まで生きていた物たちが死んでくれて作ってくれた命の資源である。その土は、俺たちにとって大事なだけでなく、10年後の、50年後の、100年後の市民にとっても、人々にとっても大事なんだ。そこに種を蒔いて、それを食べて健康に生きたいという願いのもとに、暮らしている。だから、土は俺たち、今の時代だけに提供されたものではなく、過去と広大な未来との共有財産だよね。水もそうです。緑もそうでしょう。土こそ、まさに命の源泉として、世代を超えて、何百年もの向こうの利益も考えて、そっちと私たちとの語りを抜かすことはできないと思うのです。何億年かけた命の資源ですからね。

もっと言うと、君たちはやがて、お父さんやお母さんになるのです。その子どもたちが、今どこでこの世に生まれてくる出番を待っていると思う？ 俺、良く小学校に行って、「月よりの使者」といいながらしゃべるのです。まさに土の中に50年後の赤ちゃん、100年後の赤ちゃん、5年後のカラス、カタツムリ、松の木があるとすれば、全て土の中にあるということです。土からいただいたもので、体の中で様々な養分を再構成して赤ちゃんになっていくでしょう、お母さんの体を通して。それはまさにほうれん草を食べ、カボチャを食べ、ご飯を食べ、魚を食べて、その中で赤ちゃんの体を作るものができあがってくるんだよね。つまり食べるということを通して、つまり土を通して、赤ちゃんの素材というものができあがってくるわけで、全ての元種は、土の中にあると思っています。私は。皆さんもそう思うでしょう。つまり土は、これから生まれて来るであろう全ての生き物の体の元が素材となって眠っているところなのです。つまり土を汚すということは、過去の命を汚すことであり、土を汚すということは、未来の体づくりの元を汚すことにつながっていく。

土と私たちとの命の関係というものを大事にしないといけない。土が体に付いたら、「ああ汚れた、こんなに汚いものが」といったらだめだよ。そんな子どもができちゃうから。土が体に付いたら、これはワラビ取りで行方不明になったばあちゃんかもしれないね。じゃ土にお返ししようか。これは狸さんかもしれないね。これを土の中に。手の爪の中に入ってしまった土は、カタツムリかもしれないね、土に返してあげよう。こういう教え方を是非してほしい。

土はまさに、命を巡る世界です。土と私たちの命の関係を大事にするかしないかで、決まってくる。だから、俺は思うんだ。道路を造るとか、橋を架けるとか、公共事業はとても大事なことだけど、土の健康を守るということを町ぐるみの事業として、行政の大事な事業として、公共事業として土を大事にする、そして土を豊かにして未来世代にお返しするということをおそらく地域経営の柱にすべきだと。そこから始めて、食の健康、食の安全、健康な子どもたちの誕生、生育というものが築かれていく、そういうことだと思うのです。それを私は農民の立場から、声を大にして言いたいと思います。

11. 土を食べる

レジメには、「食を考える」とあります。佳境に入りますが、結論を言えば、俺たちは土を食べているということです。土と私たちはどういう関係があるのかを大雑把に話しましたが、俺たちは土を食っているのです。けんかして、土の中に顔を押しつけられて思わず食っちゃった、ということではないのです。土を毎日、毎日食べている。さっきいった理屈で。カボチャが大きくなるというのは、土の中から様々な養分を吸収してカボチャがふくらむわけです。スイカがふくらむわけです。稲もなすびもトマトも、みんなそうやってふくらんでいくのです。

良い養分だけを吸収してふくらめばいいのですが、悪い物もたくさん吸収するんだよ。たとえばカドミウムは…よく毎年12月ぐらいになると、あそこの米からカドミウムが発見されて廃棄処分になったという話を聞きます。カドミウムというのは、大量に摂取したりすると、イタイタイ病とか、深刻に人体を壊していくものです。「痛い痛い」といいながら、寝返りを打つたびに骨が折れて死んでいく。そういう病気です。それがカドミウム汚染。どこから発生したかというと鉱山で鉱物資源を採取するときに、そのあとの後始末をきちんとしなかったために、その鉱山からカドミウムが濃縮されて出てきて、田畑に合った農作物がこのような汚染された。そういうことです。

つまり良い物も悪い物も、だいたい、大根とか、白菜とか、作物に吸収されていくのです。だから俺たちは、土を食っているのです。良い土であることは、とても大事だと思うのです。さっきピーマンで見ました。これは土の弱りです。土の弱りがこのような作物の弱りを作り出した。だから弱い土を食えば、免疫力の弱い、生命力の弱い人間になってしまう。土の汚れは、それを食べる人間の体を汚染するし、土の弱りはそれを食べる人間の体の生命力を弱くする。

土こそ命のみなもとだと思っていまして、食を語るならば土から。健康な町を築こうと思ったら、土から。未来づくりは土からと思っているのです。

本当にあった話なのですが、私の友人でトマトをリンゴの皮をむくようにむいている人がいました。手をだらだらにしながら。「何をしているんだ？」と聞いたら、「トマトというのは、本で読んだら、13回も消毒するらしい。とてもこんなふうに洗っただけでは落ちないから、皮をむいている」というわけです。俺は彼女に言った。「汚染されている土があったとする。そこに種を蒔いてビー玉から小さな玉になり、ピンポン球になり、テニスボールになって、出荷されていく。そのトマトの、皮をむいてもどうにもならないだろう。身ぐるみ汚染されているよね。土が汚染されているかどうかというのは、上っ面にさっと農薬をかけるなんていうことだけで、安全性みたいなものが計られるのではなく、土から問わなくちゃ何ともならないぞ」という話を彼女にしました。したからどうってことではなかったけれど、しました。全て土からだと思います。

皆さん、やがて栄養士となって、管理栄養士となって、行政や様々な部署で、市民に影響のある立場に立たれるわけだから、その町づくりに発言する機会もあるだろうし、一介の農民が話すよりも、管理栄養士の「私が」というときの説得力は、全然影響力が違います。是非、こういうことなんだと、みんなで食べられる土を作っていくではありませんかと、その上に健康な未来を築いていきたいと思います、それを消費者や市民がみんなで応援するというそういう農の生産と消費のあり方を地域的に築いていきたいと思いますということを呼びかけていただけたら、うれしいと思います。

そこからの関連ですが、アルゼンチンのカボチャとか、中国のジャガイモとかを食べるということは、いってみたら、そこからいえばですよ、中国の土を食べ、アルゼンチンの土を食べ、アメリカの土を食べるということにそのままつながっていきますよね。その土が、食べられるほど安全であると誰が確認した？ 誰もわかっていないですよ。カドミウムがあるか、様々な汚染があるか、誰も確認しないけれど、安いから食べる。土を食べるという本質に立ち返ってみたら、とても食べるというものではないと思います。

地域の農業こそ、まさに安全な食という物を保証してくれる大事な装置なんだということだと思

います。地域の農業と、地域の台所が良い関係をつなぐということは、これからの社会、未来社会にとっての絶対の条件、必須条件だと思います。その意味からも、皆さん、その影響力のある立場に立たれるわけだから、そういう発言を是非お願いします。

12. 最後にー夢を叶える方法ー

最後になりますが、町づくりって、なんでやっているのか。レインボープランの目的とは、何のかのと聞かれることはあります。堆肥を作って健康な作物を作ることだということ、そうだ。生ごみを土に戻すことだということ、そうだ。地域社会と地域農業が仲の良い関係になって、堂々たる田舎を築くことだということ、そうだ。全てそうです。それから行政任せにせずに、市民が町づくりに責任を持った参加の仕方をする、それを促すこと、もちろんそれもそうです。そうなんです、では、なにができるか。大雑把に一言で言えと言われると困るのですが、先程も言いましたが、思いやり豊かな地域社会を作ること。月並みだけど、生ごみを分解するということは、必ずしも即自分の利益になるかということ、ならないのです。やがてそれを使うであろう農家のことを思いやるということです。

農家にしても、化学肥料を減らし堆肥を蒔くという、腰を痛めるようなことをするというのは、即自分の利益につながるかということ、必ずしもそうではなくて、土というものを通して未来を想定したり、あるいはそれを食べる市民のことを考えて、そういうことをしています。未来の地域にも、思いを交わし合う。生ごみと健康な農産物は、地域で回っているのですが、実はそれを回しているのが、思いやりなんだと思うのです。自分以外のものに「思い」を「やる」。未来にも。それを私たちは12年間続けて来た。おそらく生ごみに限らず、地域における子どもたちをみんなで育ていくこと、あるいは地域の中の独居老人をみんなでサポートするとか、おそらく様々なところにその心のあり方が広がっていくんだ、そういう心の有り様が生かされていくと思っていて、そのメンタルを「堂々たる田舎を育ていく」ということだと思っています。

先程紹介した大野さんがこんなことを言っています。ジャーナリストの大野和興さんですが、ちょっと2～3行読みます。

「レインボープランのことだ。コンクリートや弱いもののいじめや自己責任や、そんなものの横行にみんないい加減うんざりしてきた時代、レインボープランはそうではない世の中の作り方を事実に提示している。」ということ、どこかに書いています。本当にそのような気持ちを持ってこれからも続けていきたいと思います。

終わりに、若い学生諸君に、夢を叶える方法、4つほどお伝えしたい。夢は必ず叶うから。叶うには条件があって、今から申し上げる4つの条件が、皆さんのものにできるならば、君たちのものにできるならば、君たちの夢は実現すると思う。最後にそれを申し上げたいと思う。

1つは、何か。それは自分になりたい、あるいはしたいと思うことを、頭の中にしっかりと描く。できたら抽象的にぼわっとというのではなく、青写真を組み立て、具体的に設計図を書いて、頭の中にたたき書き込む。こういうふうには私は生きていきたい、できたら収まっている自分の姿を想像してみる。にこっと笑ってみる。つまり夢をしっかりと刻み込み、それに惚れるということです。惚れて通うというのは、そういうことです。1日に何度も、自分の夢を思い出してはにこっと笑ってみる。これは絶対必要。そうすると、君たちの中に、わけのわからないパワーが生まれてくる。そして今まで自分で見過ごしてきたものが、向こうから飛び込んできていることに気づく。やがて自分は、夢への道を最短距離で生きる。そういう道が準備されていることに気づく。まだ夢がないという人もいるかもしれない。この学生諸君のいるなかで、この時間を活用して、たくさんの先生方の話を聞き、考え、悩み、自分の夢を育み、そしてそれに惚れる。これが絶対大事だと思う。ま

ず1点。

そして2点目は、難しいのだけれど、誠実に生きるということです。誠実な人間は…誠実でない人間なんていないよ…みんな誠実な要素を持っているんだけど、努めて誠実に生きようとするということが大切だと思う。なぜかという、どういったらいいだろう。何かをやろうとして、たとえば友達に話しかけたとしても、自分がその呼びかけに誠実でないところがあったとすると、言葉のパワーというのは落ちてくる。そうではないときに、認められている人間が、そのことを提案するとしても、周りに対する波及力はまったく小さい。誠実に生きるということは、自分自身のパワーを切らすだけでなく、他人に対する説得力という観点からとても大切で、何かをなそうとする上で、絶対に欠くことのできない条件が、誠実さだと思うから。これは何も夢との関係でなくても、社会的に生きていく上での力という観点からいっても、誠実に生きたかどうかというのは、表情を見ればよくわかるのです。取り繕った誠実さか、真から出てきている誠実さかというのは、しゃべって見たらわかるし、表情を見たらわかる。そのところで、相手のプレゼンテーションを聞く前に、もう相手をしっかり値踏みしてしまっているのです。社会人というのは。わかっているのですよ、もう。プレゼンテーションをする前から、「こいつはだめだ」と。そういうオーラというのは、にじみ出るものなのです。それは1年や2年で築かれるものではなく、そのように生きていくんだという、なんというかな。生き方全体が育んでいるものなのです。その説得力というのは、言葉ではない、存在自身の説得力というのは。絶対に誠実というのは大事だと思う。

そして3つ目は、何かを皆さんが共同で成そうとしたら…みんな、情熱的だし、夢を持っているし、だから一生懸命…人のやりたくないことを「私がやる」と言ってやって、そのやろうとする人のグループの中の欠くことのできない中心になっていく。その夢が達成した場合、その成果をみんなで分かち合うとき、一番最後に並ぶ。これが大事だと思う。自分の利益、個人的な利益は最後に回す。そういう姿勢をとり続けることが大事だと思う。

この3つを、あとそれらを笑顔に寄せて、自分に惚れてにっこり笑い、誠実に生きてにっこり笑い、一番最後に並んでゆっくり笑うという、笑顔に乗せてやるということも大事な。この4つですね。

この4つを君たちの夢に重ねたとき、おそらく君たちの夢は実現するよ。そう思います。

1時間半つきあっていただいて、ありがとうございました。これで終わります。

廣田／どうもありがとうございました。午後のパネルディスカッションの時に、ご質問を受けたりしようと思っていますが、午後ご都合でご退席になる方もいらっしゃるかもしれませんので、もし、ここでどうしてもお聞きしたいということがありましたら、1つ、2つは、お受けしようかと思いますが、いかがでしょうか。

よろしいですね。午後のプログラムも参加していただいて、そこでいろいろなディスカッションもできるかと思います。これでお昼休憩に入らせていただきます。どうもありがとうございました。